

ASD 児に対する CRMTS 課題を用いた漢字の読み書き指導

〇瀬谷奈々美 (作新こころの相談クリニック) 高浜浩二 (作新学院大学大学院心理学研究科)
 KEY WORDS: 構成反応見本合わせ 漢字学習 神経発達症

【問題の所在と目的】

神経発達症児は漢字の書字に困難を示す場合がある。そのような対象に対して、構成反応見本合わせ課題 (Constructed Response Matching to Sample; 以下、CRMTS) の有効性が指摘されてきている。CRMTS では、書字の獲得の効果が示されているだけではなく、絵や音声に対する単語を構成することによって、文字の読みや単語の読みの獲得が促されることも明らかになっている (清水・山本, 2001)。しかし、CRMTS の先行研究では漢字の読みと書字のうち、どちらか1つを標的としており、読みと書字のそれぞれに対して、どのような影響があるかは未検討である。

そこで CRMTS 課題を実施して、漢字の読みおよび書字の獲得に与える効果を検討した。本研究では、読みと書字の両方が未獲得な漢字に対して、CRMTS を行うことによって、読みと書きを獲得することができるのかを目的とした。

【方法】

参加児: 特別支援学級に在籍する小学校 5 年生の男児 1 名。指導開始時の生活年齢は 10 歳 7 ヶ月で、本児は H22 年 9 月に A 医療機関からアスペルガー症候群疑いの診断を受けていた。WISC-IV (CA8 歳 6 か月時) では FSIQ: 100 (VCI: 101, PRI: 93, WMI: 109, PSI: 96) であった。また、K-ABC II (CA10 歳 8 か月時) では、認知尺度が総合 107 (継次: 104, 同時: 92, 計画: 106, 学習: 127)、習得度尺度が総合 96 (語彙: 129, 読み: 82, 書き: 93, 算数: 79) であった。このことから、継次処理優位であると考えられた。漢字の読みでは、似た漢字での読み間違いが多く見られた。

場面: 大学院附属臨床心理センターの一室において、毎週 1 時間のセッションを実施した。本研究はその中の約 20 分間を使用した。**刺激の選定:** 当該学年までに学習する漢字の読みについて評価を目的として行われた。参加児にパワーポイントで漢字を提示し、対応する読みを言うことを求めた。答えの正誤に関わらず、言語賞賛や身体強化を行った。各漢字 1 試行ずつ提示し、読みを答えることができた場合を「既学習」、読みを答えることができない、または間違えた読みを答えた場合を「未学習」と判断した。その中で、読みのみを既学習の漢字を統制群、読み書きともに未学習の漢字を実験群に分類した。**手続き:** 統制群、実験群の漢字を用いて、以下のトレーニングを実施した。鶴巻・齋藤 (2005) を基に漢字を偏と旁に分けて漢字を構成する CRMTS 課題を実施した。トレーニングの教材を図 1 に示した。MT が見本刺激である漢字の読みと送り仮名を提示し、見本刺激に対応する漢字を比較刺激から選択し構成することを求めた。見本刺激に対応する漢字を構成することができた場合を正反応とし、正解であることを参加児に伝え、言語賞賛や身体強化を行った。見本刺激に対応しない漢字を構成した場合を誤反応とし、再度、比較刺激を選択することを求めた。なお、参加児が「分かりません。ヒントを下さい。」と言った場合は、偏か旁のどちらか 1 つについて正しい比較刺激を教示した。見本刺激は、1 ブロック 4 刺激で提示順番がランダムになるように提示した。比較刺激は、1 試行ごとに場所を変更し提示した。8 試行を 1 ブロックとして、1 セッションで 1~6 ブロック実施した。統制群、実験

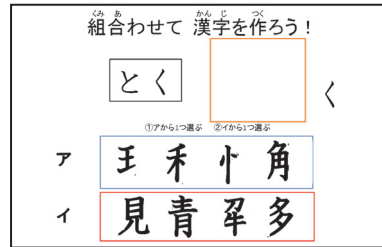


図 1 CRMTS 課題

群の順番はランダムになるように系列を組んで実施した。トレーニング 1 ブロック終了毎に、書字テストを 4 試行 1 ブロックとし実施した。漢字の書字を獲得したのものについては 1 週間後に漢字の読みテスト

と、書字の維持テストを実施した。**従属変数:** 漢字の読み及び書字に対する学習効果を評価する指標として、トレーニング中の正反応率、直後の読み及び書字テスト、1 週間後の維持テストの正反応率を記録した。

【結果】

図 2 に書字の累積獲得数の結果を示した。全体的な傾向としては、実験群に比べ統制群の方が少ない誤反応数であった。直後の読みテストでは、両群とも 100% の正反応率を推移した。また、書字テストは、実験群で 0%~75%、統制群で 0%~100% の正反応率を示した。トレーニング 1 週間後のテストでは、両条件ともに維持が見られた。テストでは、偏か旁のどちらかを書字する反応が見られた。

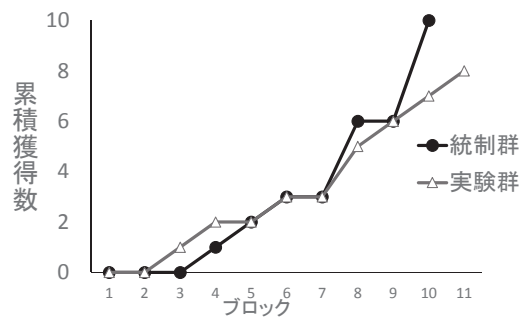


図 2 書字の累積獲得数

【考察】

読みから漢字を構成する CRMTS 課題によって、統制群だけでなく実験群でも書字の獲得が確認された。このことから、CRMTS 課題が、漢字の読みと書字の両方の獲得を促進することが示唆された。しかし、直後の書字テスト及び維持テストでは、特定の部位について、欠如や過剰が見られた。トレーニングで構成させていない部分での誤反応であった。そのため、参加児の誤反応パターンに合わせた構成をさせることや細部に注目させるような付加的手続きを用いることで解決できる可能性がある。

【参考文献】

清水ら (2001). プレーン出版, 75-96. / 鶴巻ら (2005). 福島大学人間発達文化学類論集 (1), 27-38. / 山添 (池下) ら (2008). 日本教育工学会論 32 (Suppl.), 13-16.

【謝辞】

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP16H03790 の助成を受けたものである。

(SEYA Nanami, TAKAHAMA Kohji)